大麻報道センター ニュース
THC Japan Taima Houdo Center News
薬用大麻特集号
web http://asayake.jp
e-mail info@asayake.jp

米国立癌研究所が大麻の抗癌作用を認める

2011 年 3 月 31 日 － アメリカ合衆国メリーランド州ベセスダ

米国立衛生研究所 (NIH) の一部門である米国立癌研究所 (NCI) は、大麻の活性成分が抗癌作用を持つ事をウェブサイト上で認めた。しかし、癌専門医が増殖抑制治療の目的で大麻の使用を奨める事を認めるまでには至らなかった。

この項目には、「癌自体やその治療のために起こった症状の治療のために、大麻およびその成分を用いる事についての概略」が記載されている。

このウェブサイトでは、大麻に含まれる活性化合物が癌細胞に対して選択的に働き掛けてその増殖を抑制する事が前臨床試験から示された旨を、次のように述べている。「カナビノイドは様々なメカニズムによって抗癌作用を発揮している可能性がある。例えば細胞死の誘導、細胞増殖の抑制、そして腫瘍における血管形成や転移の抑制などである。カナビノイドは癌細胞を死滅させる一方で、変異していない細胞には影響を及ぼさないようであり、むしろそれらを細胞死から保護している可能性さえ存在する。」

サイトには更に次のように書かれている。「医薬品としての大麻が癌患者らに与える可能性のある利益としては、他にも鎮吐作用、食欲増進作用、鎮痛作用、睡眠改善作用などが挙げられる。」

過去数十年の間、カナビノイドおよび内在性カナビノイドが様々な種類の癌細胞に対して抗癌作用を持つ事が幾つもの前臨床試験によって立証されている。その種類としては乳癌、前立腺癌、結腸直腸癌、皮膚癌、肺癌、口腔癌、リンパ腫などがある。カナビノイドの抗癌作用についての研究がアメリカで最初に行われたのは 1975 年の事であり、その研究報告は国立癌研究所の発行するジャーナル上で発表されている。

【出典】: NORML NEWS　March 31, 2011 – Bethesda, MD, USA

米国立癌研究所：大麻とカンナビノイドの「要旨」全文 （本文はサイトに印刷用 PDF もあります）

『 この代替医療（CAM）に関する情報の略説は、大麻草とその成分を、癌という疾病そのもの、またはその治療を原因とする、癌に関連した症状の治療のために使用することについての概要を紹介するものである。

この略説に含まれる重要な情報は以下の通りである。

大麻草は、現在のように違法物質と位置づけられる以前は、何千年にもわたって医療目的で使用されてきたものであること。

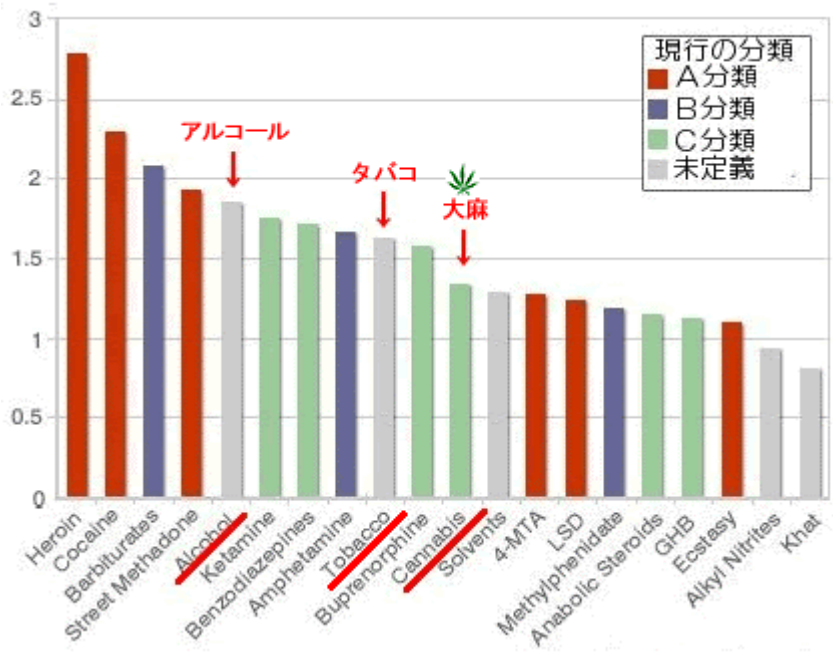
カンナビノイドと呼ばれる大麻草の化学成分は、人間の身体全体に存在する特定の受容体を活性化させて薬理学的な効果を生む。これは特に、中枢神経系と免疫系において顕著である。

カンナビノイドは、癌治療に関連した副作用を抑えるのに効果がある可能性がある。』

【出典】National Cancer Institute　Cannabis and Cannabinoids (PDQR)

【写真はスプレー式大麻成分抽出薬】

英国下院科学技術特別委員会報告

2006年7月、イギリス下院科学技術特別委員会は、科学的な観点からアルコールなど合法的なドラッグを含む20種類のリクレーショナル・ドラッグの再評価を行った。委員会はこの研究をベースに、アルコールを最も害のあるドラッグ分類（A分類）に区分するように政府に提言。大麻は害の少ないCに属している。右の表はランセット2007年3月号にも掲載された同研究論文のものである。

※現在、大麻の区分は B に戻されているが、これはドラッグ乱用問題諮問委員会（ACMD）の答申を無視した政治的な判断によるもので、同委員会議長のデイビッド・ナット教授は、大麻はアルコールより害が少ないという、科学的根拠に基づいた持論を展開して解任されている。